# 2020年度入学試験問題

# 国　　語

（試験時間　15：00〜16：00　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないようにしてください。

7．一度記入したマークを修正する場合，しっかりと消してください。消し残しがあると，マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

すわる姿勢の形態は、多くの場合、その社会で歴史的に伝承されてきた文化情報を豊かに含んでいる。また、食事や入浴、洗顔、就寝、あるいは労働や学習時の作業姿勢など、日常動作の仕方には、日々くり返されるなかで一定のスタイルがつくられている。そのルーティーン化された無形の動作はいずれも、それをおこなう人々の感覚や思考の動きが集約された身体文化(1)としての側面をもっている。

たとえば部屋のなかでは「靴を脱ぐ」という日本人の習慣は、「床に坐る」ということと密接に関連した身体文化である。正坐にせよ、胡坐にせよ、床に坐って自分の居場所を定めるときにはかならず履物を脱ぐことが、日本では古来の原則となってきた。そして鼻緒につま先をつっかける履物のスタイルも、それらをヒンパン(2)に脱着することがもとめられる生活の必然から、おのずと定型化された文化様式であり、坐と空間と履物のスタイルはひとつながりの身体文化のなかで結ばれている。古来伝承されてきた立居振舞いの論理は、このように物質文化の様式と密接に結びつきながら、身のまわりの世界を感覚し、そこから思考を組み立て、物事を認識する素地の役割をはたしている。

からだの動きにこうした秩序をもつことを、日本語では「作法」というが、そもそも「法」という言葉は仏教用語であり、パーリ語のdharmaに由来する。ちなみに釈迦の悟りは「法」の自覚にあったと伝えられるが、「法」を「作る」ことを意味する「作法」の原義は、万物に内在する「自然の理法」を再創造することと理解される。したがって、身体の動きが、自然本来の秩序を取り戻すとき、わたしたちはからだの実感として「法」をおのずから体得することができる、という思想が仏教的な修行の根幹にはあり、そうした動きを導くテクストとして、「道具」は物事の「道理」を「具える」役割をはたす。

日本語における道具と身体の関係(3)を吟味していくと、それらは「自然の理法にしたがう」という共通の秩序によって結ばれていて、物質文化と身体技法とは、互いの様式に内在する「自然性」を見極めるときに、内にも外にも開かれた「法」の自覚へと導かれるよう意図してデザインされてきたのである。

「作法」を単純に英訳するとmanner（方法・やり方）となるが、身体の動きに秩序をもつことは、ヨーロッパ諸国においても重要な意味をもっていて、とくに民衆を統治する側の階層に近づくほど、立居振舞いのあり方を熱心に教育する伝統がある。

文明史家のノルベルト・エリアスは、ヨーロッパ社会における礼儀作法の起源が中世から発生していることを跡付けているのだが、エリアスによれば、ヨーロッパに中世国家が定まる頃、騎士的な性格をもつ貴族の宮廷において定められた作法形式は「クルトワズィ（courtoisie）」と呼ばれた。これは文字通り「宮廷（cour）」的な振る舞いを意味する言葉である。それが一七世紀頃になると、国の安定とともに武人貴族が消滅し、宮廷が絶対主義的な性格を強めるようになる。この頃にはテーブルマナーをはじめとする作法形式が、教会を通じて庶民一般へと広まるようになり、するとcourtoisieという言葉はもはや使われなくなり、市民（civil）を意味するcivilitéという言葉が普及するようになる。

そもそもcivilitéとは、都市で生活する市民（civil）の振る舞いに由来する言葉であり、その類語であるpolite（丁寧であること）も、古代ギリシアの都市国家（police）で生活する市民の態度に由来する。農村部を離れ、都市（police）で集団生活をおこなう市民（civil）は、丁寧（polite）で、礼儀正しい（civilité）振る舞いを身につけなければならないという考え方を、言葉の成り立ちからも知ることができるわけだが、そして安定的な市民生活を実現するためには、都市の周囲を城壁で囲み、異民族からの侵入を防ぐための軍事力を、常に強化しておくことが必要であったことも同時に見えてくる。

たとえばヨーロッパ人の仰ぎ見てきた人間像には古代ギリシアの彫刻群がある。四肢の筋肉が発達した若者の立像は、オリンピアで活躍した戦士の肉体をかたどったものであり、有事においては身を賭して市民を守る彼らの像が、神殿に祀（まつ）られて崇拝の対象になっていたことは、つまり戦闘に勝利することが、文明化した市民生活を成立させるための前提となっていたからでもある。ヨーロッパ民族にとっての「文明」の語源をたどっていくと、そこには、「闘争に打ち勝った者だけが享受することのできる自由」という意味合いが含まれていることに気づかされる。

こうした考え方は、中世のヨーロッパにおいても同様で、エリアスによれば、彼らの民族としての自意識は、ローマを中心としたラテン的なキリスト教と、東方教会を含む異端との対立によって成り立っていた。彼らが勝ち取った自国の安定は、十字軍

遠征による度重なる植民と拡張戦争によって強化されていったわけだが、そうした史実が、言葉のニュアンスにおいても「文明（civilization）」という響きのなかに、闘争のイメージを宿すようになった。

それは現代においても、戦勝国と敗戦国との間で「文明（civilization）」という言葉の意味合いに、大きな隔たりを生み出してもいる。たとえば、英語のcivilizationやフランス語のcivilisationは、人類の進歩と自国民の誇りを物心の両面にわたって総括的にあらわす意味に使われている。ところが、ドイツ語のZivilisation（文明）は、主に物質的な発展に対してもちいられていて、芸術的な創造をはじめ、精神面での発展はKultur（文化）とあらわし、両者は明確に区別されて、ZivilisationよりもKulturの方により重要な価値が置かれている。

同じヨーロッパの国々で、言葉のニュアンスにこのようなちがいがあらわれる背景についてエリアスは次のように説明している。

> ドイツ語の「文化（Kultur）」という概念の機能は「文明化（Zivilisation）」の対立物を意味することであるが、この機能は明らかに一九一九年に、またすでにそれ以前に、再び勢いを取り戻した。それは、「文明化（Zivilisation）」の名においてドイツに対して戦争が行われたためであり、ドイツ人の自意識が、講和条約締結によってつくられた新しい状況に新たに通じなければならなかったからである。

周知の通り一九一九年とは、第一次世界大戦が終結した翌年で、ベルサイユ宮殿で締結された講和条約によって、ドイツは海外植民地のすべてを失い、領土の一三パーセントがカツジョウ[4]されたほか、当時の国民総生産額の二〇倍にも及ぶ賠償金を負うことになった。かの大戦は、植民地をめぐる世界のハケン[5]争いを動機としていたわけだが、戦場では毒ガスや航空機、戦車、潜水艦など、近代兵器が投入されることで悲惨を極めた。これら殺戮（りく）を目的とした「文明（Zivilisation）」の利器は、多大な犠牲を踏み台にして戦勝国には富をもたらすが、敗戦国に対しては、戦費による財政ハタン[6]と、不平等条約による多額な賠償金が課

せられ、物質的にも精神的にも永きにわたってクジュウを強いることとなる。ドイツ人がZivilisation（文明）という言葉に二次的な価値しか与えないのは、文明のもたらした戦争への苦い記憶が、言葉のなかにも深く染みついているからなのである。(7)

civilizationという欧州語の起源を遡るならば「[(8)]」といってまちがいではない。しかし、明治になってつくられた「文明」という言葉のなかに、「礼儀」や「丁寧なふるまい」を意味するcivilitéのニュアンスを想像することは難しい。それは「文明」という言葉が「開化」と抱き合わせになって、産業技術に裏付けられた進歩的な生活を照らす意味ばかりが強調されて普及したからでもあるだろう。civilitéの原義には思いが及ばず、主に物質的・技術的な発展を代表する言葉として、「文明」という言葉が使用されてきた感は否めない。

「文明」の利器類についても、もとを辿（たど）れば身体の延長物として生み出された道具の機能を発展させたものにほかならない。人間の能力を外に向かって拡大させていくことを目指してきた利器類は、どこまでもその機能を進化させることのできる可能性を秘めていて、そこには進歩的な未来への希望が安易に描かれる。しかし、それが他者の犠牲を踏み台にして、はじめて成り立つ利己的な進歩思想であることを黙殺してしまう不用意さが、「文明」という日本語の盲点になっているようだ。

日本に「文明」が開化した時代の背後には、西洋化を国是とした帝国を再建するために、植民地の獲得を目的としたハケン争いに乗り出していくことが同時に含まれていた。

この時期に創作された「文明」という言葉の意味について、福沢諭吉は次のように説明する。

「文明とは人の身の安楽にして心を高尚にするを云ふなり。衣食を饒（ゆた）かにして人品を貴くするを云ふなり」

「又この人の安楽と品位とをえせしめるのは人の智（ち）徳なるが故に、文明とは結局、人の智徳の進歩と云て可なり」（『文明論之概略』）

しかし、実際には「文明」という言葉の内実というのは、「人の身を安楽」にする技術を同時に、兵器へと転換することので

きる二面性をもっていて、進歩的な蒸気機関や発電装置、通信機器等の便益に、大幅に依存した社会をつくり上げることが、「文明開化」の実態であったことを、近代史は明らかにしてきたわけである。

福沢のいう「人の身を安楽に」する「文明」とは、ともすると人の身を怠惰にもすれば、危機に陥れもするから、物事の「道理」を「具える」ための「道具」に秘められた身体性からは、大きく乖離する形で西洋文明は導入され、現代の日本社会を覆い尽くすに至ったのだと言わなければならない。

つまり文明の利器類を発展させてきた技術思想と、日本語の「道具」があらわす技術思想とは、真逆の身体観の上に成り立っていることが示されるだろう。先史学者のルロワ＝グーランにしたがえば、「技術とは、人間の自然に対するはたらきかけ」。つまり、人間と自然の関係そのものをあらわす客観的な資料なのである。それは自然の素材を加工して物をつくる製作技法についても、その技術を利用して世界を変えていこうとする生き方についても、おしなべて人間の自然に対する思想と振る舞いを暗黙のうちに開示するのである。つまり暴君のように自然を支配しようとするのか、あるいは女性や小児と接するように優しく親和的に扱うのか、あるいは神を崇めるように恭しく自然を頂くのか、(9)こうした自然に対する人間の態度は、つくられた物のデザインや制作過程を吟味すると、書物に記された言葉よりも遥かに正確に、つくり手の意図と生き方を雄弁に語るのである。

（矢田部英正『坐の文明論』による）

〔問一〕 傍線(2)(4)(5)(6)(7)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(1)「身体文化」とあるが、それに関する説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 日常行われる動作がくり返されていくなかで、一定のスタイルとなることで、身体が周囲の環境のもたらす制約を離れて、新たな感覚や思考を生み出す役割をになう。

B ルーティーン化された日常の動作を行うなかで、人々の感覚や思考が身体により表現されることになり、伝統的な物質文化の様式を生み出し続けるようになっていく。

C 反復される食事や労働などの日常動作の仕方に一定のスタイルがつくられることにより、身体がむだな動きをせずにすむようになり、新たな感覚や思考を生み出す。

D 生活のなかのさまざまな日常動作は、周囲の物質的条件と結びつき、日々くり返されることでスタイルとなり、そのように伝承された動作に基づいて感覚や思考が成立する。

E 物質文化の様式と結びついて発展してきた人間の立居振舞いの論理には、感覚や思考といった精神的営みを身体を通して物質文化の一部にしていく役割がある。

〔問三〕 傍線(3)「日本語における道具と身体の関係」とあるが、それに関する説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人間が世界を統べる法の存在を感じて、日常生活でその法を体得するために道具をつくり出し、道具を利用することで身体も自然の法の一部であると自覚するようになる。

B 人間は万物に内在する法を身体を道具にすることにより自覚するが、人間のつくった物質である道具も、使用されることで、人間に自然の法に則した自覚をうながす働きをする。

C 身体の動きが秩序をもつことにより自然の法を再びつくり出すように、道具も物事の道理を具える役割をもつので、道具を使用することで、人間は身体と道具に内在する法を自覚する。

D 身体と道具という独立した存在であるふたつのものが、自然の理法にしたがうという共通の秩序によって結ばれることで、それぞれが法のもとにある同一の物であるという自覚をもつ。

E 身体の動作が秩序をもつことにより、人間は万物に内在する仏教的な法を自覚するが、物質である道具も法の道理を自覚している人間に使用されることにより、仏教的な法につながる。

〔問四〕 空欄(8)に入れるものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 文明は民衆統治の手段である

B 文明は戦闘の勝利の前提である

C 文明は生活の進歩を生む

D 文明は身体のなかにある

E 文明は明確な意味をもたない

〔問五〕 傍線(9)「こうした自然に対する人間の態度は、つくられた物のデザインや制作過程を吟味すると、書物に記された言葉よりも遥かに正確に、つくり手の意図と生き方を雄弁に語るのである」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　物のデザインや制作過程において、背景にどのような身体観にもとづく技術思想があるのか明らかになるので、書物において言語化された自然観より古い、太古の自然観が表れているから。

B　言葉で書かれた書物より、人の身を安楽にする利器という技術なのか、人としての品位を実現する技術なのか、という思想の違いが物のデザインや制作過程に表れているから。

C　一般に、物のデザインや制作過程の背景にある技術思想は、言葉で書かれた書物よりも、つくり手である人間の自然に対する態度を誤解の余地のないほどに明らかにするから。

D　言葉は他の人間に働きかけるものだが、人間ではなく自然そのものに働きかける技術は、物のデザインや制作過程のなかでつくり手の意図や生き方として言語化されるから。

E　自然と人間の関係は、暴君が民衆を支配する態度や女性や小児と接する態度、といったように通常は言葉ではなく、人間関係の比喩として物のデザインや制作過程に表現されることになるから。

〔問六〕 ドイツと日本の「文明」観の異同について筆者はどのように考えているのか、本文の趣旨に従い六〇字以内で書きなさい。（句読点も字数に数える）

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　日本では部屋で靴を脱ぐことが習慣とされるが、それは正坐にしろ胡坐にしろ床に坐るという日常の動作とつながり、また脱着しやすい下駄などの履物のスタイルもこれらの習慣から必然的に生じていて、坐るという動作、住居の様式、履物はすべてひとつながりに結ばれている。

イ　ヨーロッパにおける礼儀作法は中世国家が安定した頃、騎士的な貴族が主導する宮廷から生じたが、騎士的な武人貴族が消滅することにより、文官貴族が宮廷の中心を占めるようになり、武人貴族より生活様式が市民に近い文官貴族を通して洗練されたマナーが庶民に広まった。

ウ　古代ギリシアの戦士である若者のたくましい彫刻は、戦争で命をかけて市民を守る若者の理想像を示していて、闘争的な文明観の象徴であるが、他方で安定した市民生活の前提となる平和を求めるキリスト教の精神的な文明観があり、両者はヨーロッパで長らく争ってきた。

エ　ドイツにおいては、第一次世界大戦でイギリスやフランスなど文化的に進んだ連合国に敗北することになったため、戦場に投入された毒ガス、航空機、戦車、潜水艦などで連合国にドイツが劣っていたことも、文化的な遅れのためと考えられ、文化が強調されるようになった。

オ　「文明開化」という文明と開化をつなげる明治時代の風潮を背景にして、「文明」は利器類など「人の身を安楽」にするものであると考えられたが、そのように一面的な「文明」観から進歩的な機械類の便利さに大きく依存する日本社会がつくられるようになった。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

「機械脳の時代」[1]と言うと、読者諸賢の中には、「統計技術やコンピュータサイエンスをビジネスに活用してきた例はたくさんあり、いまさら『時代が変わる』ほどの大げさなことが起こっているわけではない」、と考える方もおられるかもしれません。確かに、統計を技術的な柱として、コンピュータサイエンスがビジネスの課題解決に用いられてきたことは今に始まったことではありません。しかし本稿は、現時点でそれ以上の地殻変動が起こっており、今までの延長線で現在の変化を捉えることはできない、少なくともそう解釈することで多くのチャンスを活用できる、という立場をとっています。

「機械脳の時代」と認識すべき理由の第一は、今まで活用されてきた統計学と、現在主流になりつつある機械学習は、根本的に異なる要素技術であるからです。統計学は、平均や分散、相関などの観点でデータの特徴を人が把握したり、人が予想するのを手助けするための学問です。一方、機械学習は、人間が機械に「この場合はこう」「あの場合はこう」という命令を出すことなしに、全てのデータを渡して後は「機械自身に学習させる」ことが名前の由来となっている技術であり、そもそもまったく違う概念です。

データが複雑になるほど、人間が個別の命令を網羅するのは不可能になります。統計学では多様なデータの平均的な特徴しかわかりません。多数の特徴だけを残し、少数の特徴は捨ててしまう、と言い換えることもできます。一方で、機械学習は全ての特徴を残したまま計算をおこなうことができます。少数派の特徴は、数は少なくても種類がとても多いのです。その結果、[2]機械学習のほうが、ケタ違いに高度で複雑な判断をおこなうことができるようになっています。

精度の点でも、機械学習はケタ違いです。旧来のやり方では、囲碁や将棋プログラムはプロ棋士に勝てませんでしたし、写真をコンピュータに見せてもその人が誰か特定することもできなかったのです。「統計学、コンピュータサイエンスがあるから機械学習で騒ぐ必要はない」というのは、「馬がいるから自動車で騒ぐ必要はない」と言っているようなもので、根本技術の差異を無視して新しいものを過小評価しています。もはや、統計学が最強の学問であった時代は終わるのです。統計学よりも、人の

介在なく、はるかに高度な判断ができる技術が登場したからです。

理由の第二は、進化のスピードの速さです。機械学習においては、原則として取り入れるデータ量が増えるほど、その成果の正確性が飛躍的に向上する傾向が顕著になります。

統計学はあくまでも平均の学問なので、こうした傾向は必ずしも明確ではありませんでした。少し乱暴に要約すると、全数を扱う機械学習ではデータが増えれば増えるほど、そのデータを結果に反映させることができる、ということです。たとえば、グーグル・カーが実験で走った累計距離が長くなるほど、今までは経験しなかった交通事情や、小動物の飛び出しなどの経験が蓄積され、それがさらに運転技術を高めて長距離を走るようになり……、という[(3)]データ規模による好循環が強力に回ることを意味します。

イソップのウサギとカメの童話ではウサギは油断して歩みを止めましたが、アルゴリズムは油断することも慢心することもなく、たとえ人が眠っていても自動改善を続けることができます。本稿の議論のモデルケースとなるような企業群は、データを集約するプラットフォームを持ち、そこに集まったデータからさらに自律的な改善がおこなわれる仕組みを備えたもので、その進化の速さは凄(すさ)まじいものがあります。彼らはいわば眠らないウサギといえるでしょう。眠らないウサギを相手に、カメとしてレースを挑んでも勝ち目はありません。今まではカメだった企業も、ウサギとしての生き方を選ばざるを得ない状況が来るでしょう。

理由の第三は、こうした「考える機能」の機械による代替は、企業戦略だけでなく、個人のキャリアや能力開発にも甚大な影響があるからです。無論、単に一つの要素技術の登場だけで、今まで培ってきた経験や、個人の市場価値が無に帰するわけではありません。しかし、鉄砲の登場で戦が変わったように、新たな武器が登場すれば、その強力さに比例して旧来の戦略や戦術の変化も大きなものになります。その運用を担う個人や組織に期待される能力が変わることも必然でしょう。

コンピュータの登場によってさまざまな仕事が自動化され、もはや以前の働き方に企業や個人が戻ることが困難なのは論を待ちません。時代が馬車から自動車に変われば、今まで馬の世話をしていた人の代わりに、車の設計や製造・修理の人の雇用ニー

ズが高まるのです。自動車技術の影響範囲は、個人のスキルセットはもちろん、運用主体、道路インフラやエネルギー政策、資源獲得をめぐる国際競争にまで及びました。では、「考える機能」が普及していき、今までは想像もつかなかった判断を機械ができるようになったら、どうでしょうか？

そうなるともはや「これは非連続的な変化ではない」と言い張るのは難しいのではないでしょうか。少なくとも個人のキャリア開発の観点では、新たな技術を見据えて必要な能力を涵養（かんよう）することに時間を使うほうがはるかに生産的です。基礎技術の理解においては、その影響の範囲や規模の特定が重要です。(4) 産業革命期は、単に技術としての蒸気機関の時代ではありませんでした。これから私達が生きる時代が「ＡＩの時代」や「機械学習の時代」ではなく、「機械脳の時代」であると理解いただきたいのは、こうした理由からなのです。

（加藤エルテス聡志『機械脳の時代』による）

注　グーグル・カー……米国グーグル社が開発した自動運転車で、すでに米国などの公道上で走行している。

アルゴリズム……コンピュータにプログラムの形で与えて実行させることができるよう定式化された、処理手順の集合のこと。

プラットフォーム……ここでは、大量データを集めビジネスに活用するための基盤技術やデザインという意味。

〔問一〕 傍線(1)「機械脳の時代」とあるが、その内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人間が命令を出すことなく、与えられたデータをもとにして機械自身が学習をするようになり、逆に人間に命令を出す時代。

B 囲碁や将棋の対局で人間よりもアルゴリズムを実装した機械の方が勝利するように、コンピュータの能力が飛躍的に伸びる時代。

C データ量の多い少ないではなく、データの内容が現実の経験に対応しているか、ということまでをＡＩが判断できる時代。

D 機械が自ら考えることができるようになり人間の能力を超越し、人間の脳の働きが不要となり、機械が脳の代替をする時代。

E 機械が人間の命令なしに判断できるようになることで、人間も機械との関係において従来とは異質な能力を期待される時代。

〔問二〕 傍線(2)「機械学習のほうが、ケタ違いに高度で複雑な判断をおこなうことができる」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 統計学を用いた旧来のやり方では、データが複雑になると人間が逐一命令を出せなくなるのに対して、機械学習では、データがどんなに複雑になっても、人間が機械を補助的に用いながら場合ごとに適切な命令を出すことができるから。

B 統計学を用いた旧来のやり方では、複雑なデータに応じて網羅的に命令を設定することが不可能になるのに対して、機械学習では、機械が人間に代わって大量データをもとに、どの場合にどう判断すべきかを逐一学習していくから。

C 統計学を用いた旧来のやり方では、多数のデータの特徴だけを捉えた平均や分散、相関といった、データ全体の傾向しか示せないのに対して、機械学習では、少数のデータの特徴も残したまま計算して、データの歪みを表現できるから。

D 統計学を用いた旧来のやり方では、平均値のような数値しか算出することができず、そこからは多数派の特徴しか読み取れないのに対して、機械学習では、少数派の特徴も読み取れるユニークな値が複雑な計算を通じて算出できるから。

E 統計学を用いた旧来のやり方では、データとして採用されるのは多数の事象に限られ、少数の事象は計算外となるのに対して、機械学習では、数の多寡にかかわらず、すべて事象が網羅的にデータとして採用され、計算が行われるから。

〔問三〕 傍線(3)「データ規模による好循環」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 機械学習とは機械自身に学習させる技術なので、休まずに学習を続ける機械は絶えず新しいデータを取り入れてデータ量を増やしていくことができるため、成果の正確性も絶えず高めていくことができるということ。

B 機械学習の場合、取り入れるデータ量が増えるのに比例して機械に課せられる計算量が増大するので、データ量が増えるほど機械の処理速度は向上し、その結果、他の機械に対する差がさらに広がるということ。

C 機械学習においては、より多くのデータを集めた企業や機械が、少数事例をより多く学習して自律的改善を行うことで精度を向上させ、その結果、さらに多くのデータを収集でき、それがさらなる精度の向上につながるということ。

D 機械学習という、いわば眠らないウサギが登場したことにより、自律的改善が行われる速度が増加した結果、さらに精密な計算結果が得られ、それが新たな学習データとして活用され、後発者に一段と差をつけるということ。

E 機械学習では、データが増加してもあまり変わらない平均値のような数値ではなく、新しいデータが加わる度に増加していく累計距離のような数値が問題となるので、データ規模の増大がそのまま結果に反映されるということ。

〔問四〕 傍線(4)「産業革命期は、単に技術としての蒸気機関の時代ではありませんでした」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　産業革命期は単に要素技術としての蒸気機関だけで定義できるわけではなく、今日一般的に普及した内燃機関の発明と普及に結びついたという意義を見逃してはならないということ。

B　産業革命期は単に技術面で変化を生んだということに止まらず、技術的変化が人間精神にも一大変革をもたらし、現代につながる新たな学問的潮流を生みだしたということ。

C　産業革命期は蒸気機関の発明をもって始まったとか、あるいは蒸気機関車の登場によって定義されるというように、単純かつ明確に区切られるものではないということ。

D　産業革命期は個人の主体的な生き方や非宗教化を促したという人間精神の変革でもあって、純粋に技術の問題としてのみ語り尽くせるものではないということ。

E　産業革命期は単に技術面の発展だけで語り尽くせる時代ではなく、同時代の個人や社会に広範な影響がもたらされた意義を洞察することこそ重要であるということ。

〔問五〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　データが増加するほど精度が高まる機械学習の時代においては、データを集約するプラットフォームを持つ企業が有利だが、他方、滅多に起きない事象を監視する眠らないウサギのような非プラットフォーム型企業も勃興する。

イ　馬の世話をしていた人に代わり車の設計や製造・修理の人が求められた時代が終わり、機械が人間に代わって自律的に学習していくようになる今後は、馬の世話に象徴されるようなアナログな仕事が人間には求められる。

ウ　機械学習が登場したことで広範囲の変化が生まれた結果、非連続的な変化を象徴する知識であるコンピュータサイエンスを習得できるかどうかが、新時代の個人のキャリアや能力開発に決定的な意味を持つ。

エ　従来の統計学を基礎とした方法論では囲碁や将棋でプロ棋士に勝てなかったコンピュータが、機械学習に基づくアルゴリズムを実装することにより、高度で複雑な判断を下せるようになって飛躍的に精度を向上させた。

オ　機械学習やＡＩといった要素技術の側面からのみ未来を把握するのではなく、機械による「考える機能」の代替がどれくらい個人や社会に影響を及ぼすのかということを視野に入れながら、未来の変化に対応していかなければならない。

三　次の文章は、以前から恋愛関係にある和泉式部に対して、帥宮（そちのみや）が地方へ行く女に送る歌の代作の依頼をしてきた場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。（30点）

かくて、(1)つごもりがたにぞ御文ある。(2)日ごろのおぼつかなさなど言ひて、「あやしきことなれど、日ごろもの言ひつる人なむ[A]遠く行くなるを、あはれと言ひつべからむことなむ一つ言はむと思ふに、それより(3)のたまふことのみなむ[B]さはおぼゆるを、一つのたまへ」とあり。あなしたり顔と思へど、「(4)さはえ聞こゆまじ」と聞こえむも、いとさかしければ、「のたまはせたることは、いかでか」とばかりにて、

「(i)惜しまるる涙に影はとまらなむ[C]心も知らず(5)秋は行くとも

まめやかには、(6)かたはらいたきことにも侍（はべ）るかな」とて、端に、

「さても、

(ii)君をおきていづち行くらむわれだにも憂き世の中にしひてこそ経（ふ）れ」

とあれば、

「(7)思ふやうなりと聞こえむも、見知り顔なり。あまりぞおしはかり過ぐい給（たま）ふ、憂き世の中と侍るは。

(iii)うち捨てて旅行く人はさもあらばあれまたなきものと君し思はば

ありぬべくなむ[D]」とのたまへり。

（『和泉式部日記』による）

注　日ごろもの言ひつる人……このところ帥宮が通っていた女性。　またなきもの……二つとないもの。

〔問一〕 傍線(1)「つごもりがた」とあるが、これは何月の月末のことか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 三月　B 五月　C 七月　D 九月　E 十一月

〔問二〕 傍線(2)(4)(6)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(2)「日ごろのおぼつかなさ」

A 日没後の足元の悪い様子
B ここ数日の不審な行動
C 最近の疎遠なこと
D 日中の心細いこと

(4)「さはえ聞こゆまじ」

A そんな代作のようなことはとてもできません
B それでは相手を感動させることなどできません
C そんなことならもう歌など詠めるはずもありません
D そうはいっても相手は代作だと気づけないかもしれません

(6)「かたはらいたきこと」

A 緊張すること
B 笑止千万なこと
C 傍若無人なこと
D きまりの悪いこと

〔問三〕 傍線(3)「のたまふ」の主語を左の中から選び、符号で答えなさい。

A 帥宮　B 和泉式部　C 地方へ行く女　D 一首　E 文

〔問四〕 傍線A～Dの「なむ」のうち、文法的に異なるものを一つ選び、符号で答えなさい。

〔問五〕 傍線(5)「秋」に掛けられている同音異義語を左の中から選び、符号で答えなさい。

A 空き　B 飽き　C 明き　D 安芸　E 商

〔問六〕 傍線(7)「思ふやうなり」という言葉に込められる心情の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 帥宮が地方へ行く女に未練を感じていることに対する、和泉式部の嫌悪

B 和泉式部が地方へ行く女に嫉妬していることに対する、帥宮の得心

C 帥宮が自分の愛情を疑っていないことに対する、和泉式部の安堵(ど)

D 和泉式部の代作の歌がすばらしいことに対する、帥宮の満足

E 帥宮が代作は当然だと思っていたことに対する、和泉式部の不満

〔問七〕 文中の和歌（ⅰ）（ⅱ）（ⅲ）の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A　代作を頼んだ帥宮への恨みを込めた歌
B　帥宮から依頼された代作を断る歌
C　地方へ行く女への送別の歌
D　地方へ行く女に同情する歌
E　和泉式部の愛情を頼みにする歌
F　和泉式部の愛情を疑う歌